

# 安田宗生教授を送る

鈴木 寛 之

安田宗生教授が熊本大学に赴任されたのは1980年4月である。その前年の1979年に法文学部の分離・改組に伴い、文学部に新設された地域科学科のなかに民俗学講座が設けられた。当時国立大学で民俗学を専攻する講座を持っていたのは筑波大学のみであり、九州の大学で初めて設置された民俗学のコースでもあった。

1980年春、第1期生が2年次となったこの時点が民俗学研究室の実質的な誕生の時であった。完成したばかりの研究室の書架に本が1冊もない状態からのスタートであったという。その後1983年に民俗学の大学院修士課程、2007年には博士課程が設置された。文学部の学科再編・改組が続く中、1996年には民俗学・文化人類学の両講座が一体化した文化表象学研究室が誕生し、2005年以降はそれぞれが再び独立する事となった。このような熊大民俗学研究室30年の歴史は先生ご自身の歩みと不可分なものである。

先生は授業や放課後の自主ゼミ、民俗調査の現場で数多くの学生達を徹底的に鍛え上げ育てられた。博識で情に厚い先生は、意欲ある学生にはご自身の研究蓄積と調査資料とを惜しみなく与え、困難な境遇にある学生は文字どおり親身になって面倒をみ、公私共に支えられた。先生の指導を受けた学生の中からは大学教員、博物館学芸員、文化行政関連職員等、卒業後も民俗学の第一線で活躍する人材を多く輩出した。卒業生達は卒業後も調査実習に助言に訪れ、多くの博物館実習生達を受け入れ、後輩達の面倒をみながら厳しく育てあげる姿勢を継いだ。

大学に赴任される以前、先生は熊本県の文化課に勤務されていた。文化行政の実情を知悉しておられる先生は、民俗研究にとって重要となる研究者の組織化にも早くから意を注がれた。精度の高い調査研究の実現のため、一大学といった制度的な枠組にとらわれない熊本民俗研究会、龍田民俗学会などの組織を立ち上げられ、その組織的調査は県下を中心とする数多くの自治体史編さん事業の成果としても結実した。

先生の民俗学における研究テーマや手法は、学界に登場した初期の頃から独自性の高いものであり、先見性に満ちたものである。ふだん先生がご自身の研究について語られる機会はほとんどないのだが、

あらためてその研究業績一覧を拝見すると、その核にあるのは民俗学にとって資料とは何かという問いであり、資料こそが民俗研究の要だという確信に基づく明確な方法意識が一貫していることがわかる。これは東京教育大学の史学方法論教室ほか多くの先生方との出会いから形作られたものなのであろう。

先生は2008年に文学部から大学院社会文化科学研究科に籍を移され、とりわけ文化行政・学芸員専門職コースの設営に力を尽くされた。また同年から熊本大学60年史編集室の室長をも兼任され多忙な毎日を過ごしておられる。その中で2008年10月には先生を実行委員長とする日本民俗学会第60回年会が熊本大学で開催された。公開シンポジウムのテーマは「「新国学談」再考 ——先祖・供養・祭り——」。これは柳田国男という日本近代の知の巨人にどう対するかという先生の年来の問題意識に基づいた企画であり、広く学界以外の一般の関心も集めた催しとなった。

今回ご退職を迎えられるに当たってこのように先生のお仕事を振り返ってみると、本学の研究教育両面における功績の大きさをあらためて実感する。先生は民俗学はもちろん歴史学・考古学・人類学等、様々な学問分野に通じておられ、話好きでいらっしゃる先生の汲めども尽きぬ知性から学ばねばならない事は山ほどある。先生はご退職後も60年史編集室室長のお仕事を継続されるので今後も学内でその機会が開かれていることを心より仕合せに思う。

最後に私事であるが、かく言う私自身は民俗学を学び始めの頃に安田先生の教え子の方に導かれ育てられた世代に属している。その私は熊本大学赴任以来、先生には公私共に大変ご心配・ご迷惑をおかけすることが多く、失礼千万な発言も多かったことを思い起こすにつけ冷や汗が出る思いがする。それらをご寛恕いただき今日まで見守り導いていただけた事に心より感謝を申し上げますと共に、先生の今後の益々のご健康とご発展を祈念申し上げ、お送りする言葉とさせていただきます。